

見通しをより確かにするための指導の工夫とその考察

田中康夫他

I はじめに

心身障害児に対する教育の目標は、一人ひとりの全人的発達を促し、その可能性を最大限に伸ばすと共に、可能な限り社会自立を目指すところにある。この社会自立を目指すためには、身近生活の自立から職業自立に至るまで、教育内容を幅広く用意し、一人ひとりの実態に応じた指導が展開されなければならない。このため指導内容としては、教科学習のみではなく、作業学習や生活単元学習、各種行事を中心とした学習等、生活や経験を重視した教育内容が必要となってくる。特に、健常児と比べて社会参加する年齢が早い現実を考えると、心身に障害をもつ生徒達にはより早く、確かに自立できる力を身につけていくことが重要となってくる。

そこで本校の養護学級では、次のような願う生徒像を掲げ、生活単元学習や作業学習の時間を教育課程の中心に指導を行なっている。

— 願う子ども像 —

- 創意を生かし、意欲的に学習する生徒。
- 豊かな情操をもつ生徒。
- たくましい精神と強靱な身体をもつ生徒。
- 勤労を重んじ、力を合わせて集団生活の向上につとめる生徒。

平成2年度の生徒は、男子11名、女子8名計19名であり、学年別、障害別内訳は次の通りである。

(1) 学年別生徒数

学年	男	女	合計
1	4	3	7
2	4	1	5
3	3	4	7
合計	11	8	19

(2) 主障害別生徒数

主障害\学年	1	2	3	合計
ダウン症	0	1	2	3
自閉的傾向	0	3	1	4
単純精薄	7	1	4	12
合計	7	5	7	19

II 研究のねらい

自立した姿を願いつつ生徒の実態をみると、生徒によって詳細な部分は異なるものの、マイナス部分としては大きく次のような特徴があげられる。

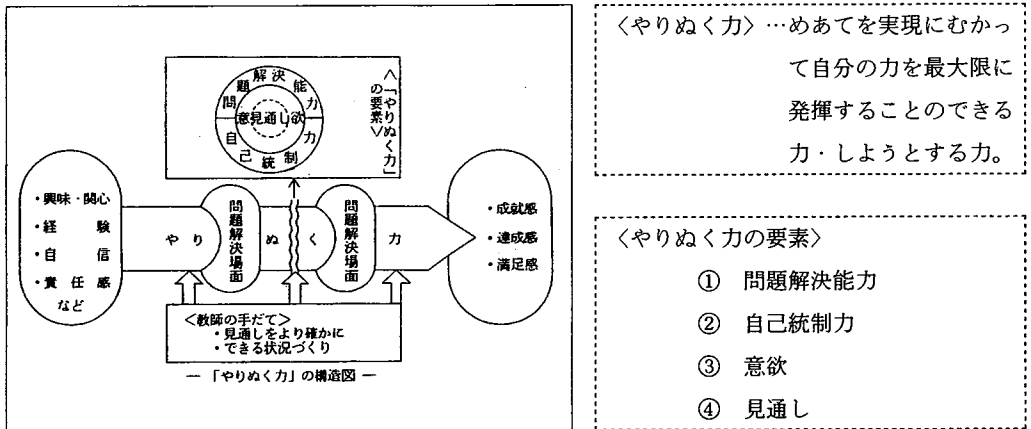
- 能力があるにもかかわらず、作業などになると長続きしないことがある。

- ・ 集団との関わりがうまくいかないために能力が十分発揮できない場面がある。
- ・ とりかかりは意欲的であるが、途中であきらめたり投げ出したりすることがある。
- ・ 1つ1つの活動は一生懸命行なうが、つながりが十分理解できず意欲を失うことがある。

こうした現実の姿から、自立する力のひとつとして、まず「やりぬく力」を育てることに視点をあてて研究を行うことにした。中でも「やりぬく力」の基盤であると考えられる「見通し」を中心により有効な手だてを工夫し、その考察を加えることにした。

III 研究の基盤

附属小・中学校の共同研究では、「やりぬく力」の定義、それを構成する要素、育てていく過程を次のように捉えている。



まず、大きなめあてにむけて取り組みを続けていくためには、その過程で生じるいくつかの小さな課題を乗り越えていかなければならない。その中では自らを、課題に対してより主体的に組んでいくよう感情や行動をコントロールする自己統制力と、課題を自らの課題と捉え、それを解決する方法を見つけ、実行していく問題解決能力の2つが大きな支えになると考える。しかし、これら2つの力が育ち、十分に発揮されていくためには、めあての実現にむけて主体的に取り組もうとする意欲が持続することが不可欠である。生徒が行動を起こし、めあて実現に至るまでの過程全体は、常に意欲によって支えられてこそ行動が持続していくものと考えられるからである。従って「やりぬく力」を育てるためには、意欲を高めることがまず必要であるといえる。

次に、生徒の主体的な行動を生み出す意欲を支えるものは何であろうか。私達は、その一つの要素として、物事への見通し、課題にむけての見通しがあると考えている。それは、1つ1つの行動をめあてにむけた一つの行動として確立させ、なおかつ今の行動と次の行動とのつながりをもたせることができるという点で重要な要素として考えるからである。合わせて、このようなつながりを理解しながら活動することは、逆に今の行動をより主体的にさせることにもなり、活動自体の充実にもつながる。従って、意欲をより高め「やりぬく力」を育てるためにも、まず最も基盤となる見通しをより確かにもてる手だてを探ることが必要であると考えている。

そこで、見通しがもてるということは次のことが理解できることと捉えた。

何のために=目	的	い	つ=日時・時間
どこで=場	所	だ	れが=分
なにを=対象、内容		どうする=手	順

勿論課題によってはこの中のいずれかの項目が、既に理解されているものもあろうし、生徒の実態によっては、いくつかしか理解できないことも考えられる。しかし、経験を大切にしながら繰り返し学習を積み重ねていくことで、一つでも多くの項目が理解できることを願って指導を行っている。

以上のように、生徒が課題達成のための手がかりを見つけ、利用していく力を育てるには、確かな「学習を見通す力」を培う必要があると考え、次の点に視点をあてて実践することにした。

- ① 課題解決場面を物理的に狭めて、生徒に全体像が見えやすくする。
- ② 課題解決場面をできるだけ細かく区切り、段階的に発展していけるよう場面設定を行う。
- ③ 個に合ったように目標設定を工夫し、できる状況作りに努める。
- ④ 成功感・成就感を大切に、くり返し学習を積み重ねていく。
- ⑤ 全体像が見えやすくするため、視聴覚的な手だての工夫を行う。

この中で、①②③を中心に試みた実践を2例取りあげて考察してみたい。

Ⅳ 実際の取り組み

1. 実践 ① —— 一坪菜園の取り組みから ——

作業学習の一環として、年間通じて活動しているのが野菜作りを中心とした附中農園である。この学習は、次の観点から、見通しを育てるのに効果的であると考えている。

- 1) 畑作りから収穫までの作業が、ほぼ同じ内容であると考えている。
- 2) 時期、場所、種類を変えて活動することで、一連の流れを繰り返し学習することができる。
- 3) 収穫により、作業の代償としての結果が得られ、成就感や満足感を味わわせることができる。
- 4) 数量、調理、買い物、販売等、生徒の意欲や興味を高める広範囲な学習が展開できる。
- 5) 草とり、土起こし、土運び等、個々の能力に応じた課題が設定できる。

しかし、実際の作業の中では次のような生徒の実態がみられる。

- ・ 作業、特に初期の草とり、土起こし等、労働性の高い作業になると長続きしない。(目的意識が薄い)
- ・ 種まき、苗植え等の作業では、間隔や量を考えながら作業することが難しい。(手順がわからない)
- ・ 種まき後は、成長の過程・草が生えること等関心が低くなる。

このような実態の要因の一つは、共同作業ということで意欲の点で他人任せになるということが考えられるが、それ以上に学習の特性である「長時間にわたる活動」ということがあげられる。つまり、目に見える結果が短期間で得られないために、生徒達が見通しをもちにくく、それが意

欲を失ったり、関心が低くなったりすることにつながるのではないかと考えられる。そこで取り組んだのが一坪菜園であった。これは、生徒一人ひとりに一坪程度の土地を与え、苗植えから管理・収穫までの一連の流れを個人の責任で行なおうというものである。

——手だてと生徒の反応——

① 土地の分譲

生徒達に「自分の土地」という意識をもたせるために、土地の分配は自分でくじを引く抽選で行なった。土地に番号をつけ、アミダで決定するというやり方である。生徒の中には、日当たりの加減や、水やりの便利さ等を考え「あそこがいいな」と期待しながらくじを引く者もみられた。土地が決定すると、自分の番号と土地の位置をマッチングさせながら「やったあ」と大歓声をあげるなど、大変盛りあがった抽選会になった。



——一坪菜園への苗植え——

② 苗の選択

同じものを、同じように育てるのでなく、自分は自分の好きな野菜を、自分なりに工夫しながら育てるという意識をもたせることが一人ひとりの意欲をより高めると考え、苗は好みに応じて選ばせた。「ナス」「トマト」「トウモロコシ」「ピーマン」の4種類から2種類を選択したが、食べることに結びながら選ぶので「〇〇は嫌いだから」とか「〇〇はおいしいよ」等、収穫のことを考えながら決定することができた。結局いろいろな組み合わせができ、バラエティーに富んだ畑が並ぶことになった。

③ 看板作り

個人の所有意識をさらに高めるために行ったのがこの看板作りである。これは、何の条件もつけず、とにかく自分で土地の所有者を表示する看板を作り設置しようというもので、生徒一人では製作することが難しい者もあるため、家庭にも呼びかけた。その結果、形や大きさ、色、材料、デザインなど様々なものが集まり、個性的な看板が立ち並ぶことになった。さらに看板作りは、保護者にも意識を高めることになり、後の活動でも親子で栽培といった形に発展することができるなど、予想以上の効果をあげることに繋がった。



——看板が並んだ菜園——

④ 畑の管理

草取りは定期的に自分の土地を中心に行った。自分の土地だけを草取りすればよいという

ように、場所が限定されていることに合わせ、所有意識が高いことも手伝い、意欲的に草取りする生徒が多くみられた。F・Tが、経験を生かして鍬を使いながら土を柔らかくして草取りをしていると、他の生徒もそれを見て鍬を持ってきて作業し始めたり、肥料を倉庫から持ってきて撒き始めると、自分も撒こうとする生徒が出る等、自分から工夫しようとする主体的な姿が広がる場面が見られるようになった。又、場所が少ないことで時間的に早く終わられるため、草取りに対するイメージも変化した様子であった。

⑤ 収 穫

育てている野菜が異なっているため、収穫時期に差がでたり、収穫量が違う等、他の野菜作りでは見られない戸惑いも生徒達にあったが、それ故に一層期待や喜びも膨んだ様子であった。友だちのトマトやピーマンを収穫する姿に刺激された生徒が、小指大のピーマンや青いトマトをとってしまうなど、失敗や事件(?)も何回かあったが、これもこうした期待感の現われであっ



—待ちに待った収穫—

たと思う。逆にこの経験は、「どんな色や大きさになれば収穫できるか」を理解させる、新しい学習の場にすることができた。そしていよいよ収穫日がくると、数は少ないものの満足感と喜びに満ちた表情で一つ一つを丁寧にとり、それぞれ家へ持って帰った。

2. 実 践 ② — 三瓶山一周ウォークラリーの取り組みから —

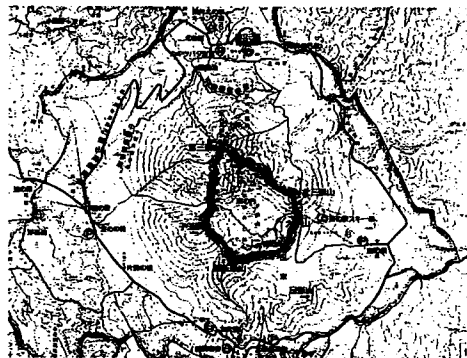
三瓶山一周ウォークラリーは、年間3回発展的に実施している合宿学習の中で、最終段階にあたる秋の合宿(2泊3日)のメインの活動として行ったものである。実施にあたってのねらいと手だては次の通りであった。

- 1) 大自然の中で、日頃積み重ねてきた体力作りの成果を試し、次の課題を探る。
- 2) これまでの体験や既習の知識・技能、その他あらゆる学習の手がかりを駆使して見通しを立て、最後までやりぬく態度を培う。
- 3) 集団生活に必要なマナーや生活技術を身につける。

— 実施にあたっての手だて —

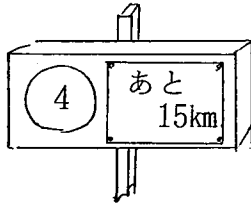
① コースの設定

三瓶青年の家を起点に、三瓶道路を西の原・東の原へと経由してゴールするコースとする。これは逆コースになると、終盤に上り坂が続くため、意欲持続という点でこちらの方が適切で



あると考えたからである。

② ポイントの設置とその工夫



1 kmごとに左のようなポイントを設置した。目標をできるだけ小さく区切ることで見通しをもたせ、意欲を高めることをねらったものである。表示の内容も、ただスタート地点からの番号だけでなく、「あと〇km」と残りの距離を表示することで、ゴールまでの見通しをもちやすくなるよう配慮した。

③ 個人カード

生徒一人ひとりに右のような個人カードを持たせ、ポイントに到着する毎に指導者が通過時刻とサインをすることにした。これは、それぞれの段階で指導者が評価していくことで、生徒自身が自己評価することができ、成就感や満足感をもつことにつながる。さらにそれが次の段階への励みや意欲の高まりにつながることをねらって行ったものである。

班	年生	なまえ	平成2年11月28日(水) 出発 時 分
18	12	6	
17	11	5	
16	10	4	
15	9	3	
14	8	2	
13	7	1	ゴール

—個人カード—

④ 休憩・昼食のとり方

休憩や昼食の時刻や場所については特に設定せず、生徒の状況に合わせてグループごとに指導者の判断でとることにした。これは場所や時間を決めてしまうことが、生徒を追いたてる結果になり逆に意欲を失わせてしまうのではないかと考え、1日をゆったりした形でゴールにめざせるよう配慮したものである。

その他生徒の安全性の点から、無線での交信を絶えず行なうことや、予想されるグループ数に合わせて、本校の教官以外に青年の家の先生方にも指導者として参加をお願いしたり、終了の時の処置等いくつかの配慮事項についても準備をして実施した。

— 生徒の様子と結果 —

- ・ 何事にも強い興味を示すAちゃんは、ビニール袋を片手に道端の花や木の実などを集めながら歩く。植物についての話に一層興味関心を高め、袋いっぱいになるほど集めてゴールイン。



—ウォークラリーの出発—

- ・ 先頭グループでゴールしたF君やA君達は、タイムをかなり意識しながら取り組み、個人カードに記入される時刻を見ながら、時には走りながらゴールを目ざし、4時間40分で完歩した。
- ・ 昼食は12時になったら状況を見ながらグループごとにとろうということであったが、遅れて到着した二人以外はほぼ同時刻に西の原へ到着

することができた。予想したほどグループも分かれず、大きな集団のままでお昼を迎えられたのには驚いた。

見通しをより確かにするための指導の工夫とその考察

- ・ 残念ながら完歩できなかったNちゃん。途中何度も道端に座り込み、リタイヤしかけたものの1km毎のポイントが励みとなり、「看板はまだ？」と言いながら立ち上がっては歩いた。
- ・ 同じく完歩できなかったAちゃんは、Nちゃんと一緒に互いに励まし合って歩いた。Aちゃんは、ポイントに着いて個人カードにサインしてもらうのがとても楽しみで、そのことが嬉しくてゆっくりではあるが歩き続けた。
- ・ 毎朝のトレーニングでは、途中で座って動かなくなったり、他の場所へ出かけてしまう等なかなか意欲が続かないS君。大好きな青年の家の「雪お姉さん」と一緒にがんばって歩いた。終盤は小雨の中を黙々と歩き、6時間10分でゴールインした。



19名中17名の生徒が見事に完歩することができた。16.5kmという長い距離、しかも終盤は小雨が降り出す悪条件が重なったにもかかわらず、これ程の生徒達が、自分のペースに合わせてゴールインできたことは、予想以上の結果であった。残念ながら完歩できなかった2人も、約12km（東の原）まで歩き通し、時間切れのためにやむなく終了した程であった。この2人も、本人達にとっては自分の持っている力を十分発揮して終えることができたので大変満足そうであった。

大型7人班 1年生 蓬田○茶○
平成2年11月28日(水) 出発10時20分

18	11:25	11:30	13
17	11:40	13:40	5
16	10時20分 田中	14:17	4
15	10:45 田中	14:22	3
14	10:58 小野	14:38	2
13	11:16	14:57	1

三瓶奥中ウホ-7ラリー完歩おめでとう

トロ 班 3年生 蓬船○茶○
平成2年11月28日(水) 出発10時0分

18	11:25	13:30	6
17	11:40	13:40	5
16	10:25 田中	14:09	4
15	10:45 田中	14:22	3
14	10:58 小野	14:38	2
13	11:16	14:57	1

三瓶奥中ウホ-7ラリー完歩おめでとう

大型7人班 1年生 蓬仁○若○
平成2年11月28日(水) 出発10時20分

18	11:25	13:30	6
17	11:40	13:40	5
16	10:20 田中	14:09	4
15	10:45 田中	14:22	3
14	10:58 小野	14:38	2
13	11:16	14:57	1

三瓶奥中ウホ-7ラリー完歩おめでとう

1:10: 班 2年生 蓬次○康○
平成2年11月28日(水) 出発10時20分

18	11:25	13:58	6
17	11:40	14:28	5
16	10時20分 田中	15:08	4
15	10時45分 田中	15:20	3
14	10:58 小野	15:35	2
13	11:16	15:53	1

三瓶奥中ウホ-7ラリー完歩おめでとう

-集計された個人カード-

三瓶合宿だより

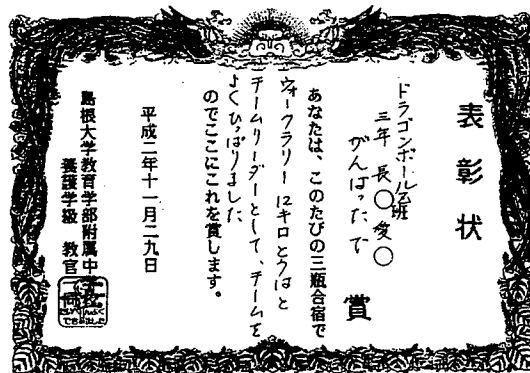
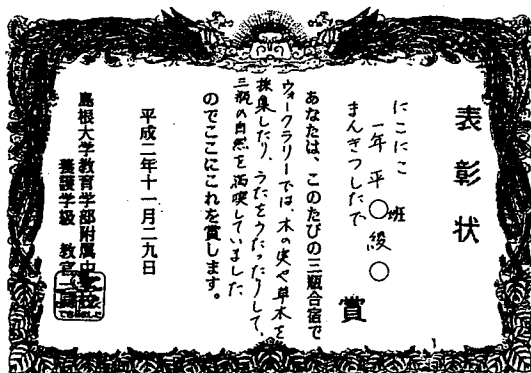
みなさんおはようございます。三瓶三日合宿の様子を少しお伝えしたいと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。

三瓶三日合宿の様子をお伝えしたいと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。

おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。

おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。おかげさまで、三瓶三日合宿は大成功に終わったと思います。

感想を載せた「号外 合宿だより」



努力を賞えた表彰状

V 考察と反省

1. 一坪菜園の取り組みについて

夏休みまで続けた一坪菜園は、同じ時期に行なったジャガイモ作りと比べ、次のような違いを見せてくれた。

- 1) 草取りや畑打ち等、準備や管理のための作業が意欲をもってできた。
- 2) 観察力が増し、花の色や葉の大きさ等に驚きを示したり、実をつけたときの喜びを示すなど、興味・関心が持続できた。
- 3) 人が踏んだり折ったりした時や、風で倒れた時等は大声で注意したり、添え木を自分で探してきて立てる等、一本の苗に愛着をもち大切にしようとする姿がみられた。

- 4) 水やりや肥料やりを自分から行なう等、どうすれば早く大きく育つか工夫しながら活動する姿がみられるようになった。
- 5) 作業も含めて、苗植えから収穫までの全体にわたって「野菜を収穫する」という意識を持続させることができた。

このように一坪菜園は、他の野菜作りと比べて大きく異なる姿を生徒達は見せてくれた。これは、場所を限定し活動内容や目標を見えやすくすることが、見通しをもち自分もやろうという意欲や、自分にもできるという自信へとつながったと思う。それが他の作業では指示されていやいやしていたことでも、自主的にやろうとする姿となって現われたといえる。又こうした意欲的な姿は、個人の所有意識の高まりにも起因しているとも考えられ、これからの野菜作りの方法について検討してみる必要があると考えさせられた取り組みであった。

2. 三瓶山ウォークラリーについて

実施前は、生徒の実態や初めての挑戦ということ等から、小グループに分かれたり、一部の生徒しか完歩できないと予想していた。それが悪天候にもかかわらず、予想以上の成果をあげた。それを考察してみると次のようなことが考えられる。

- 1) 距離的にも体力的にも疲労のピークになる終盤に、平坦で木立ちの中を歩けるコースを設定したことは、「できる状況」づくりとして適切であった。
- 2) 1km毎のポイントの設置は、生徒の途切れそうになる意欲を持続させるのに有効だった。次のポイントを目指しながら1つずつ段階をクリアし、ついにはゴールできた結果からも、小さな目標への見通しが、大きな目標到達への力となることを教えられた。
- 3) 「あと○km」の表示は、数量が理解できる生徒にとって、ゴールまでの見通しの手がかりとなった。特に先頭グループが、時には走りながら進んだことは、表示をもとに時間と距離を見通しながら活動した現われたと考えられる。
- 4) 個人カードは時間が理解できる生徒にとって、1区間の所要時間が明らかになり自己評価できる手がかりとなった。又理解できない生徒にとっても、指導者のチェックが喜びになり、次のポイントへの新たな意欲につながった。課題解決の段階を細かく区切ることで見通しがもちやすくなり、又評価することで得られた成就感が、次の意欲への高まりへと結びついたといえる。
- 5) 指導者の配置や数が適当であった。特に青年の家の先生方との交流は、生徒達にとってはとても新鮮で、楽しく参加できるきっかけとなった。

以上のように、このウォークラリーでは、見通しをもたせることで意欲の高まりを図ろうといくつかの手だてを構じた。その手だてがこのように、最後までやりぬこうとする姿に結びついたことは、大きな成果であった。生徒にとって、16.5kmを完歩できたという経験は大きな自信になることは確かであり、この自信がさらに



－ポイントでのチェック－

今後の学習へ発展してくれることを願うと共に、きめ細かな手だての必要性を痛感させられた実践であった。

Ⅵ ま と め

より確かな「学習を見通す力」が、生徒の意欲を高め、やりぬく力を育てると考え、5つの視点をもとに実践を行ってきた。

一坪菜園や三瓶山ウォークラリーの取り組みでは、これまで述べてきたように、生徒は予想を越えた新しい姿やがんばりを見せてくれ、細かな手だての大切さを改めて教えられた気がする。何等かの障害が起因で知的にも、体力的にも、身体機能的にも劣り、その上情緒的にも不安定な障害をもつ生徒は受け身的になりがちである。そのためとすれば「できない」「だめだ」といった否定的な見方で受けとめられ、保護という名目のもとに一層「できない状況」に追いやられてしまうことが応々にしてある。しかし、この実践を通して、様々な生活体験の場を設定し、見通しが持て、意欲が高まるような、細かな配慮の中で生徒に取り組みさせていけば、「やりぬく力」が育ち、「できる」喜びを味わわせることが十分に可能であることが明らかになった。こうした自信や経験の積み重ねは、私達の願う「自立する力」に必ず結びついていくと確信している。

今後も生徒の自立した姿をめざして、いろいろな角度からその手だてについて検討し、生徒達の満足感や喜びを大切にしながら実践研究を進めていきたい。

〈引用・参考文献〉

- 1) 文部省「心身障害児の社会自立を目指した教育」 1988
- 2) 中坪晃一 自立を促すために 「月刊 発達の遅れと教育 No.392/1990」 日本文化科学社
- 3) 祐宗省三・堂野恵子・田中敏明 「やりとげる力を育てる」 有斐閣 1985
- 4) 島根大学教育学部附属小学校・中学校「第13回障害児教育を語る会紀要」 1991
- 5) 島根大学教育学部附属中学校 「第33回研究発表会要項」 1990